

# 創造力を破壊する「自主活動」

## サードウェイブ実験

これは、1967年にアメリカのカリフォルニア州の高校教師ロン・ジョーンズ氏によって行われた集団心理に関する実験です。ジョーンズ氏は、歴史の授業で「ヒトラー率いるドイツナチスの残虐行為」についての講義を行ったところ、ほぼ全ての生徒が「許せない」と反発しました。そこで彼は、授業の中で、「ジョーンズ先生」をリーダーとした架空の社会運動を行いました。その過程で、生徒たちは、先生の話を聞くときは直立不動で敬語を使う等、「自主的」に細かいルールを決めていきました。そして、運動を続けるうちに、生徒たちの気持ちは盛り上がり、自らロゴマークを作り、敬礼の手法を決め、さらには、他のクラスの生徒を勧誘するようにもなりました。実際、これを機に、多くの生徒の成績が向上したことから、自分たちがしていることは良い事だと思いつつ、今度は、この運動に賛同しない者には暴力が振るわれたり、ルールを守らない者は密告されるまでにエスカレートしました。この運動は校外まで広がり、結果、強制的に打ち切られたのですが、最後にジョーンズ氏が「この運動のリーダーは、私ではなくヒトラーです」と告白したところ、生徒たちは愕然としたそうです。

## 増え続ける「問題点」と「疲労感」

右記は極端な例ではありませんが、何かを「自主的」に行うことは、時と場合により、毒にも薬にもなるということです。わが社でも、「JRK」「〇〇委員会」といった「集団」による「自主活動」が数多く存在します。何でも、「業務上の問題点をみんなで議論し、改善に努めること」で社員同士の絆が深まり、職場が盛り上がる「らしいのですが、それは、一回きりの活動・成果をうわべだけ見るから起きてしまう勘違いであり、本来なら、毎年、「問題点」が次々に見つかるような「労働環境」、そして、「仕事の不満」を解消するためにもう一つ仕事を増やし、私たちだけが「疲労」し続けるという事実を問題視しなければいけません。こうした長期的視点が失われると、「自分たちは良い事をしている」という誤った共通認識のもと、「活動」に参加しない社員は、みんなの足を引っ張る「異端児」とみなされ攻撃対象になります。社内は、誰もが疲れ切ったギスギスした職場だらけになります。「自主活動」とはいえ、その「主体」はあくまで会社。「リーダー」を間違え、「労働者意識」を取り去られた先に待つのは、本末転倒の悲劇です。

安全やサービス上の問題は、「人員不足」や「労働強化」によって生じるものですが、それを社員の「モチベーション」の問題にすり替えられることで、「権利」を主張しづらい構造になっています。



『THE WAVE ウェイブ』ドイツで映画にもなりました。



第 188 号

2024年 7月1日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

NTT 092-483-1515